

大經師昔曆

近松門左衛門作

上卷

歌から猫がねこよぶとてうすげしやう。するはしほらしや。猫さへも。夫ゆゑ忍ぶに我身は。何とから打の。エイソリヤ綱より。とけぬ契りぞや。じやれてそばへて手まりとれくまひとつふたつ。みつ四ついつひつなゝつる八つるこゝのほんほとをんゑ。ゑいころくく。ころり火燧にしなだれて。なつくもおのが。戀ならん。それは昔の女三の宮是はあさんの當世女。夫の名さへ春を以ては色香に鳴る。梅の暦の根本大經師以春とて。袴いらずの長羽織家居も京のどうぶくら。諸役御免の門作り名だかき四條烏丸。すでに貞享元年甲子の十一月朔日。來る丑の初ごよみけふよりひろむる古例に任せ。主以春は未明より。禁裡院中親王家五攝家清花の御所方へ。新曆を献上し方々のめでた酒。嘉例のごとく去年のごとく。十徳着ながら火燧に。とんと高いびき。算用場には手代共進上曆の折包。江戸大坂のくだし曆地賣子供の取さばき。一門振舞祝儀の使。竈の霞皚の雪。春めき渡る

摺鉢の音。今日の霜月朔日を元日とこそ祝ひけれ。おも手代助右衛門。此家のたばね綿の小紋の羽織。主も心を奥島の袴もと渡りの昆布の皮。こはばつたる顔付にて。ヤ旦那はまだおやすみか。夜の中から方々の勤くたびれは道理。申しあさん様。茂兵衛めが戻つたら代らうと存ずれど。どこにのらをかはくやら。二條むきお屋敷方の進上曆が。あそなはる。一息に廻つて來ませう。嘉例の通御一門衆お出なされう。御臺所か姫君の様に。猫ちやうらかしてござつてもすまぬ事。これ玉。同じ様にそれなんぢや。奥の臺子も仕かきや。庭の小座敷も掃除しや。火燧に火を入りや。遠棚のほこり拂ふて雙六盤將棊盤。碁石の数もよんで見て。手水鉢に水入させ手拭もかけかや。たばこ盆に切炭いけて膳立をして腕ふいて。お給仕に差合はう夕めしはやう食てしまやと。一口に千色程。まだめんどうな其の猫めぎやあくとほへるが能で。鼠一疋取りはせず。あねこ見てはびろくと屋根も垣もたすらぬ。重て屋根でさかつたら四つ足くつて西の洞院へながしてくりよと。なんのかけもかまひもなき猫に迄澁口の。茶の間中の間すみく見廻し。それ久三挾箱。曆くばる家によつてお引が出る。只取ると思ふな給分に引きつぐ。ことはつて置いたぞと打ちつれ表に出でにけり。あさん玉が顔見合せ。なんと今のを聞きやつたか。同じ物の云様